

特別講演会「よみがえる関東大震災：ある地震学者の防災論」開催される

企画総務グループ幹事

高橋一紀

鹿島建設(株)小堀研究室の武村雅之氏を講師に招き、表記の特別講演会が平成 17 年 8 月 3 日(水曜日)に地盤工学会 JGS 会館大会議室で開催されました。当日は猛暑の中、支部長、学生会員を含む 40 名強の方々が参加され、約 2 時間にわたって熱心に聴講されました。講師の武村氏は地震学がご専門の理学博士であり、日本地震学会をはじめとする複数の学会の理事、委員のほか、地元の八王子市教育委員会の委員などを務められています。講演は、ご自身が地震学という理学の立場から工学に関与することになったご経験から、「地震学は地震に好奇心をもつ」のに対して、「地震工学では地震を敵とみなす」という違いがあることを、まず話されました。そして地震を知ることが大事であるという視点から、地震学の立場から関東地震などの過去の歴史地震を分析してこられた成果をもとに、被害と地盤、人々の生活、気象との関係ならびに今後の防災への教訓を紹介されました。とくに、関東地震ではマグニチュード 7 以上の余震が 6 回も起こったこと、火災による犠牲者の増大は台風の影響であり、延焼は徐々にひろがったこと、旧東京市は現在よりも過密都市であったこと、利根川の瀬替え跡にあたる東武日光線沿いが大きくゆれたことなどは意外に知られていなかったことではないでしょうか。

防災にあたっては、阪神大震災や善光寺地震の山津波災害などを引き合いに、多くの住民の自然、歴史に対する理解が欠かせないと強調されました。山や谷があれば、それを造る地震や地盤災害があったことになります。武村氏が参画している地震火山子供サマースクールでは、これらの自然の見方、歴史を子供たちに伝えていく努力をされていて、その子供たちが表現した、「地震は一瞬、恵みは一生」「一人の百人力より百人の一人力」という言葉に、自然との付き合いかたが集約されていることを示されました。

スマトラ地震津波で注目された、小学校の古い国語の教科書に載っていた「稲むらの火」は、当時の地震学者であった今村恒明が、再三にわたって文部省への強い働きかけたことによるものであったそうです。

このように、意外に知られていない事実や挿話が盛り込まれたとても興味深い講演であり、私たちの生活と地盤工学が関与する防災実務についても大変有意義な内容でした。講演後の質疑も大変活発に交わされ、会場で販売された講師の著書の売り上げも大変好調であったことも付記しておきます。